

長くは続かなかつた。それは幕閣の執政土居大炊頭利勝  
本田上野守正徳等によつて改易の沙汰があり、すでに覺  
悟をきめていた忠直卿は、越前六十七万石を擧廢のこ  
と捨て、配所たる豊後の国津守に赴かれたのである。  
途中、敬賀でてい駈して、法名を一偈と附けられ、時  
元和九年(一六三三)九月のことで、忠直卿三十才であつた  
と云う。へちまに大分市に銘葉一偈と云うのがあつた  
これが忠直卿の別号から取つたものと思われる。

その後につける忠直卿の生活は前記行狀記の通りであ  
るが、浮世のことと諦めた一偈公は深く佛道に帰依し、  
ことば靈山の十一面觀世音を尊く信仰して、居館から程  
遠からぬ靈山寺に暇を見ては登山し、今に見られる日光  
陽明門をかたどつた山門を寄進されたのである。

このことについては先般登山の際、靈山の和尚也立  
川先生より聞いた通りであるが、唯立川先生のご説明で  
少し違ふと思われるところは飛來の由來で、飛來は支那  
の山からと云つてゐるがそうではなくて、豊饒善鳴録卷  
の五(小野英治氏引用)に記されてゐる。

「秋那伽は天竺の人なり・推古帝の季年はるかに支那  
とこえて日本に觀す。豊後植田山と望む。愕然嘆じ  
て曰く、奇なる哉この山、恰も西域の鷲峰小嶺に似た  
り。」

とあり、この場合の西域は、大きく印度の北中部も含ま  
れてゐることである。外にも印度北中部を西域と記され  
てゐる書を見かける。(玄奘三蔵の西域記)

鷲峰小嶺とは靈鷲山のこと、秋那伽が法華經を説いた  
ところ、法華經序品第一に「是の如く我聞き、一時佛  
王舍城耆闍崛山中に住したまひ、大比丘衆千二百五十  
俱なりき、云々」の耆闍崛山こそ靈鷲山のことである。

この耆闍崛山は、耶馬溪羅漢寺の山号でもある。  
それで飛來山靈山とは、中印度マカド國王舍城靈鷲山  
より飛來したとの意味と受けとれる。

悲劇の人忠直卿と、大分の新名所靈山寺とは、まことに  
因縁淺からぬものと覺える。尚居館や墓所などこの附  
近の史跡を更に詳しく、色々調べて見たいものである。

(住所 南阿蘇郡本庄村三股・文化財調査委員)

探訪記

佐伯惟定の墓を尋ねて

三重県津市の四天王寺とさぐるの記

高木 嘉吉

四月二十二日から三十日まで京阪に遊んだ。曙の結婚式に参  
列し、有博を見送る事が主目的であつたが、四月二十五日小関  
寺で探訪を行つた。同寺にある佐伯惟定以後の佐伯氏の入  
入と墓を訪ねたいと、かねてから念願してゐたが、ついに実現した  
わけである。同墓地には既に牙田親問と小野会員が訪れてゐる。  
以不見聞のままに記して参考にして欲しいと思ふ。

京神樂から近鉄特急で津に向つた。かたりの距離であるが快適  
にと歩いて、二時頃おまわりで到着した。

訪ねる四天王寺は駅から遠くないことも分つた。雨が激しく、歩  
いては少しぬれになると思つて車に乗つたので、一服する間もなく到  
着した。

寺は小丘を背にして静寂の地にあつた。山門をくぐると、正面に  
本堂があり、右手に文化住宅様の庫裡がある。本堂も庫裡も簡  
素な建物である。後で聞いたことだが、戦災で建物全部が焼失し、  
現在のものは戦後に再建したといふことである。

庫裡の玄關に声をかけると、窓対に出たのは年配の婦人であつたが、  
大意を告げてしばらく話すうちに住職夫人と分つた。そして住職は

不在と知らされて残念であつたが、突如然ら訪問で止むを得ぬこととあきらめられた。しかし何たる不運と天を仰いで、長嘆せざるを得なかつた。

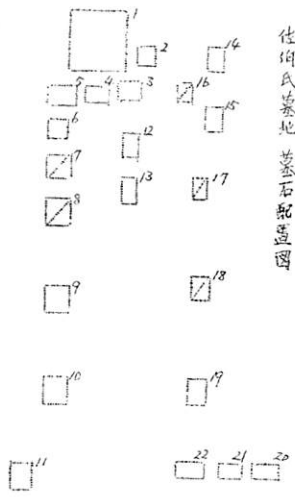
往職夫人は遠来の舟をねぎらいながら親切に忖度して下さつたが、佐伯氏のことについては存せぬの一点ばかりであつた。佐伯氏の墓地についても、ひしめはよく知らない様であつたが、色々話している中に「おれがも知れぬ、兎も留御紫内して見ましよう。」と茶室に立られた。

雨と雑草で歩きづらい墓地の山径をしばらく進んで、「此処ではないでしょうか。」と往職夫人が立ち止つた所に一群の墓石があつた。最も大きい墓石に眼をこらすと、すく佐伯の二字が見出されて、此処が訪ねる墓地であることが分つた。

それは墓地の上方のちよつと平坦になつた小じままりした一廊であつた。墓地はかたまりの広さ(土、六坪)と持つているが、柵もなく、墓石の位置も乱れ、香花の供された跡もなく、雨も加かつて葉條たるものであつた。各門佐伯氏の末路を偲んで感慨無量、沈思黙想を久しくした。往職夫人から一通りの説明を聞き、一先ず引き取つておつて、早速吉野に取つかつた。

先ず墓石配置の略圖を丹念に描き、次に一石一石の墓碑銘の筆写をばじめた。しかし無情な雨及び此の仕事を妨げて、文字は読みずらく書写は困難で、幾度か天を仰いで嘆息した。加うるに墓石に覆いかかっている稚木雜草を掃き除き、文字をふさいでいる苔を除く等、晴天よりは一挙手一投足ですむことも思ふ様に出来ず、

佐伯氏墓地 墓石配置圖



根が尽きて諦めたことと屢々であつた。後掲の墓碑銘に依り式は不明としてある所も、晴天ならぬさしたる困難をしのぎぬるもつてあつた。とに前此處で二時尙半雲霧苦悶して一恣仕事を終つた。

下山して再び往職夫人に会い、布施を乞はして佐伯氏の諸靈に談話を依頼し、晝食を馳走されながら、よも山の話を交した。別れるに当たつて寺の娘さんが自家用車に取まで送つて下さつた。有り難く、この旅に爽やかな思い出を残す一勳であつた。近鉄特急は快走又快走、朝のうちに京都駅まで私を運んで、無事に一日の旅を終つた。

(附記)  
右の次第で四天王寺で尋ねたら、佐伯氏の後胤の人の消息が分るものではあるまいかという、はかない希望は消え去つた。往職夫人から、久しく祀るべし無縁墓地に手を懸いて、若し祀るべき人の所在を御存知ならば知らせてほしいとのことであつた。しかし其の人は私達に知らぬに任せて、どこかに居るのではあるまいか。佐伯史談の此の記事が機縁となつて、

その人の所在が明らかになることと、何か有い望を待つまゝである。

(上記墓地 墓石の文字採録) 一抄

1. (正面) 洞嶽院殿海鏡居士 性居士 大徳三庚午年 八月十一日

(左側面) 大神嫡胤佐伯権佐惟信

2. 寛政二年庚戌六月 日 洞嶽院玉雲寺峰居士 八代目大神嫡胤佐伯権佐惟亮

5. 文化十二年壬午年五月 日 本光院殿玉室新峰大姉 大神嫡胤佐伯権佐(以下不明)

10. 文化九年壬申十一月廿六日 玉光院殿氷心園如大姉 佐伯惟明妻

11. 享保十八癸丑年正月初十日 梅嶺院殿天詠淨泉居士 大神嫡胤佐伯真記惟吳

15. 瑞祥院殿瓊嶽身光大姉 佐伯権之助惟貞妻

21. 寛政三年庚戌十月十三日 雲嶽院殿快嚴惟慶居士 七代目大神嫡胤佐伯権佐惟徳

22. 寛政十一年己未年九月二日 梅嶽院殿芳空貞林大姉 大神嫡胤佐伯権佐惟徳後妻

▽ 惟定(惟貞?)の墓を求めたがそれらしいものは見つからぬ。僅かに此の惟貞妻とある。尚七代目、八代目などあるが誰から教えらるるか不明。(後略)

(以上)